

△書評△

安部彰『連帶の挨拶——ローティと希望の思想』

生活書院、一九〇一年

渡辺啓真

本書は、リチャード・ローティの政治思想を取り上げ、「連帶への希望」を語りひらこうとする意欲作である。ローティは、「哲学と自然の鏡」（一九七九年）の出版以後、「哲学の終焉」、「連帶か客觀性か」、「ポストモダン・ブルジョア・リベラリズム」、「哲学に対する民主主義の優先」、「リベラル・アイロニスト」など、挑発的かつ意表を突くフレーズで、さまざまな論争を引き起こしてきた。それは、自説を体系的に展開するというより、哲学史や現代思想を舞台に、評価する学者との論議を擁護しつつ論敵への批判と対話を縦横に繰り広げることでその旗幟を鮮明にするというスタイルともあいまって、彼の思想の全體像をとらえ難くしてきた。しかし、ここ十数年余りの間に、とくにその政治思想に関連した研究書が多く出版され、日本でも「ローティ」をタイトルに冠した著作が複数出版されている。ローティ自身の全面的協力のもとに書かれた、ニール・グロスによる伝記的、知識社会学的研究⁽¹⁾が出版されるなど、彼の思想

の持つ意義と射程について見定めようとする関心が強まるなか、本書もまた、こうした流れに棹差す一冊であるといえよう。しかし著者によれば、本書は「ローティ思想の詳細かつ判明な見取り図」（一一頁、以下、括弧内の頁数は本書のもの）を意図したものではない。本書の目的は、ローティ「政治」思想の内在的で独創的な解釈の提示と、その思想の批判的繼承をつうじて現代の状況に一個の希望／思想を投げ入れることである（六頁）。そして(1)ローティにおける「正義」と「アイロニー」という主要概念の結びつきに関して、アイロニーが「残酷さの回避」の契機で（も）あるということを明らかにし、さらに、(2)ローティの「正義」論の可能性と限界を、あくまで我々の社会的「現実」との対照において展望することを試みた点に成果があるとされる（一二頁）。本書の特質は、著者自身の問題意識とローティのテキストが共振する部分を突破口に、ローティを内在的に超えてローティ思想の可能性を見いだそうとする点に

あり、またその過程で、ローティに関する内外の著作に目配りするのみならず、リベラリズム、民主主義、正義論、承認論、ケアの倫理などをめぐるよりひろい議論の文脈に論及しようとしている点にあると思われる。

このような射程を持つ著作について紹介し論評するという役目は評者の手に余るものである。以下では、その概要を紹介し、いくらかのコメントを付け加えることで、その責めを果たしたい。

全体は二部に分かたれている。まず、「第一部 ローティと

ともに——ローティ『政治』思想の究明」では、「第一章 『哲学』批判から『政治』へ」で最初期からのローティの哲学的遍歴を辿り、「哲学」批判から「政治」思想への展開の道筋を跡づけ、「第二章 ローティ『政治』思想への導入」で、その人権論を取り上げる。ローティは、「人権」を非歴史的な人間本性から基礎づけることを批判する「反本質主義」の立場から、人権を社会的構築物とみなし「人権文化」ととらえるが、その特質、意義が確認される。そして「第三章 アイロニーと連帯による『正義』」において、ローティ『正義』論のキーワードである、「連帯」と「アイロニー」に焦点を当てて、「公／私の区分」「残酷さの回避」といった論点との連関を読み解いていく。確認されたのは、公私の融合の試みを批判して公（政治の語彙）と私（個人の「善」をめぐる語彙）を峻別する点、「偶然

性の承認」が「リベラルな社会のメンバーの徳」であるのは「残酷さの回避」の契機となるからであること、アイロニーもまた「残酷さの回避」という「我々」の「正義」の契機となりうこと、そして「残酷さの回避」は、合理的に正当化不可能な、経験的事実としての価値であること、である（九六一七頁）。そして最後に、ローティが、なぜアイロニーをあくまで私的な実践と規定し、その公共的な側面を前面に打ち出さなかつたのかという問い合わせを提示し、第二部での課題を、その解明と、ローティ「正義」論の有効性と可能性を「プラグマティズムの格率に照らして検証する」ことと定める。

「第二部 ローティを越えて——ローティ『正義』論の批判的継承」では、まず「第四章 残酷さについて」で、ローティの「正義」概念をめぐる主論点として「残酷さの回避」をとりあげる。その内実を、ローティが着想を負っているシュクラーの見解とともに吟味し、「残酷さ」の規定が変容ないし混乱しており、とくにアイロニーを強調し始める時期に、「屈辱」などの精神的苦痛を含むとする理解から、「残酷さ」が身体的苦痛に限定されていく点に注目する。

続く「第五章 ローティの挑発と社会的連帯再考」は、回避されるべき「残酷さ」のうち、基本的な苦しみである「貧困による苦しみ」の除去、「財の（再）分配」をめぐる問い合わせに焦点を当てる。そして、ヒューム的転回（九三頁）以後のローティが推奨する「方法」、すなわち「他者の受苦への共感」、なかでも

「『身近な』他者への共感」を取り上げ、そこに道徳的普遍主義に対するローティの挑発をみる。さらに現代において「非人称の連帯」の不安定化が社会的連帯における「承認」の位置の見直しを促しているという問題意識から、ローティの挑発こそ「承認」の問題と同型の問い合わせ提起しており、「身近な他者による相互信頼」を重視する点で、ローティは社会的連帯を直接的な互酬にもとづけ「人称的な連帯」を「非人称の連帯」に代替すべきオルタナティブと位置づけていると結論する（一六六頁）。

「第六章『身近な他者』への共感」の隘路」は、第五章で取り出された「人称的な連帯」が、社会的連帯の安定性と〈承認〉をめぐる問題を解決しうるかをめぐって、「人称的な連帯」の理念を「ケア倫理」ととらえて考察する。まず、「グローバル倫理」の普遍主義に比して、ケア倫理は「身近な他者」に対する倫理的配慮だけでなく倫理的責務をも優先すべきだとする「依怙與眞の倫理」であると規定する。そのうえで、ケア倫理においても問題となるべき「普遍的なケア」の可能性を問う。その戦略としては（X）「ケアユニット／ネットワークの遍在化」と（Y）「ケア対象の拡張化」が考えられる。これらの達成によって、「人称的な連帯」にもとづく自発的な連帯が形成され、したがって〈承認〉の問題もクリアされうると考えられるからである。

しかし両者とも隘路に突き当たり、人称的な連帯に堵けられた

「承認」の確保という課題も隘路に至る。（X）については、「ケアユニット」を「信頼に基づく連帯」と捉えるなら、「社会関係資本」としての信頼を醸成する条件そのものの前提が満たされていない現代社会の現実が無視できない障害となる。（Y）についてはどうか。ここで、再度ローティが召喚される。ローティの語る「希望」とは、飢えた遠くの他者と食事を分かち合いたいという欲求が「私の自己」の構想に密接に織りこまれることになるかもしれない」という、自己の偶然性からくる自己の再定義、再記述の可能性に賭けることだからである。しかし、「他者との物理的／心理的な距離感の縮小と他者への道徳的距離感の縮小はおなじことがらではない」（一九九頁）。他者の窮状への同情は、救済への行動につながる実質的連帯をもたらすわけではない。著者はここにひとつアポリアを見る。さらに、「身近な他者」からなる「親密圈」こそ〈承認〉の場とみなしうるが、そこは、相互配慮による安全・安心の場であるとともに、関係の持続性（非退出性）ゆえにペターナリストイックな非対称的関係による自由の束縛という面を併せ持つ。また、〈承認〉の現実が外との差異を前提として成立しているという制約も無視できない困難をもたらす。以上から、ケアの普遍化、「人称的な連帯」の達成は幾重にも制約されていることが明らかとなつたが、終章においてはあらためて（Y）の問題が論じられる。

「終章 共感の再配置——『距離』を超えて」は、「不正」に

ついての感覚の生成とその深化・拡張とともに道徳原理への「信」が構築されたという見通しを背景に、まず共感がいかにして道徳的行為の動機づけに関わるかを問う。道徳的行為の心理機制の研究では、同情心と行動への動機の強さとを関連づける機制として、犠牲者との距離（感）（近接性）、「鮮明さ」、「焼け石に水効果」の三つが指摘されるが、著者は、なかでも「鮮明さ」こそが道徳的行為へのより強い動機づけに関わると、ヴァーバリルのローティ論を参考しつつ主張する。ローティは、共感の限界を乗り越えるために、他者の生のより「詳細な記述」によって、他者を「我々の一員」とみなし、道徳的アイデンティティの再記述によつて、行為への動機づけをも維持できるとしたが、ヴァーバリルは、ローティのいう共感的関心の拡張が、「北米の民主主義の幸運なるアイデンティティの拡張を再肯定するにとどまる」と批判し、さらに、アイデンティティの概念に拠るよりも、「彼らの苦しみにまつたき現実性（reality）」を認める能力」にこそ訴えるべきであるとする。そしてヒュームこそ「他者の苦痛の『実際（reality）』を経験すること」の力を認識しているとし、遠くの他者に対して「生気に満ちた像と表象によつて我々にあらゆる感情」を呼び覚ますのは「詩人の仕事」であるとするヒュームの言葉を引く。著者はこのヴァーバリルの見解に同意して、共感による連帯の鍵は、他者との「距離」の縮減ではなく、他者の受苦という「現実」であるとする（二二七頁）。ローティは感情教育の重要性を説く点ではこのこ

とに気づいていたのだが、共感の偏頗性、「距離」の問題に拘泥した点で誤っていた。我々の共感能力は、「より大いなる苦難／不快へと差し向かう傾き」（二二八頁）をもつており、それは別の意味での偏向であるが、他者の苦しみについての「詩作」や「物語」によつて強化でき、「残酷さの回避」へと寄与する潜在性を持つ点で望ましい偏向なのである。

以上の議論をふまえて、「結語にかえて——欲望」という名の倫理では、あらためて総括がなされる。「社会」をささえる多様な欲望のうち「正当」といえるのは、「他者の受苦への共感」によつて「残酷さ」を回避したいという欲望であると確認し、この欲望が我々の中に「すくなくとも潜在してはいる」（二三四頁）という「希望／思想」の可能性を示路づけ、その障害を除去する見通しをローティとともにえこと、以上が本書の眼目であった。ただ、ローティの基礎づけ主義批判に対しては、「基礎づけへの志向をもつたメタファー」（二三六頁）もまた「残酷さの回避」に寄与しうるとして、疑義を唱える。さらに、ローティがあくまで私的な実践として推奨した「アイロニー（という態度）」の公共的側面について、その志向する連帯が、互いの尊重の相互性を志向する「足し算の関係」ではなく、われわれのアイデンティティの偶然性、代替可能性を認め、「引き算の関係」「下らない」という相互性（二四〇頁）であるとする独自の解釈を提示して本書は閉じられる。

以上、著者の自説が展開されている第二部を中心に紹介した。やまやまな問い合わせ提起され、本文を補足する詳細な注も多数施されており、全体の理路、細部のニュアンスを十分に汲み取れていないこと恐れる。しかし、「他者の苦への共感」による人称的な連帯の拡張、普遍化の可能性という視点から、ケア倫理、社会的連帯論、承認論、ヒュームの共感論などを参照して、(ローティを超えて)より整合的なローティ政治思想の解釈を試みた点に本書の意義があることは疑いない。ローティがアイロニーを私的な領域に限定する点を批判し、アイロニーが「残酷さの回避」にむすびつく契機となる点に注目するのも、また基礎付け主義的な議論に一定の意義を認めるのも、著者独自の解釈の一環として注目される。

最後に感想めいたコメントを付け加えさせていただければ、本書の解釈によつてリベラルとしてのローティの顔がぼやけてしまうのではという印象を持つた。というのも、ローティは、たしかに「我々」の道徳意識・感情の土台を普遍的な薄い道徳原理でなく親密圈に発する「厚い」(thick)道徳とするが、それが次第に拡大し「薄い(thin)⁽³⁾」とのとなっていく先に「正義」の問題をみてくるからである。リベラルな社会における「我々」とは、「残酷さの回避」という一点で人類全体あるいはそれ以外にも拡大されるような希薄な連帯なのではないか。著者のいうようにその拡大の契機が「他者の苦痛の『実際(reality)』」を経験するかであったとしても、また、ローテ

ィが「公／私」の区別に拘るの、著者も指摘するようにプライバートな領域が「私秘的な内面」でなく「我々」の世界、「自己創造の語彙」を共有し新たな語彙の創造を試す場だからであり、それをパブリックな「我々」の領域と切り離すことが、パブリックな連帯を通じた社会改良という点で一定のプログラマティックな意味をもつと考えるからではないであろうか。

本書は、その文体においても視野の広さにおいても、刺激に富んでおり、わらなる問い合わせ読者を誘うであらう(たとえば、ローティにとっての「我々」を我々はどうといえることができるか、「なにが残酷か」をめぐる問題、多元主義とりべラリズム、等々)。それらを含む残された課題についての考察の成果が、本書で予告されてくるように、公にされる」とを期待したい。

注

(1) Niel Gross, *Richard Rorty: The Making of an American Philosopher*, University of Chicago Press, 2008.

(2) Christopher J. Voparil, *Richard Rorty: Politics and Vision*, Rowman & Littlefield, 2006.

(3) Richard Rorty, "Justice as a Larger Royalty," in Richard Rorty, *Philosophical Papers*, vol. 4, Cambridge UP, 2007.

(わたくし らくめい・大谷大学)